

令和 4 年 6 月 22 日現在

機関番号：32660

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00512

研究課題名(和文) 環太平洋と環大西洋の比較冷戦文学史構築ための基礎研究(カリブと東アジア)

研究課題名(英文) A Basic Reserach Toward the Comparative Cold War Literary History in Transpacific and Transatlantic Regions (the Caribbean and East Asia)

研究代表者

吉田 裕 (Yoshida, Yutaka)

東京理科大学・教養教育研究院葛飾キャンパス教養部・准教授

研究者番号：20734958

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、環大西洋及び環太平洋地域における旧植民地地域(とりわけカリブ海地域と朝鮮半島および沖縄を中心とする東アジア)がそれぞれにどのような困難を抱えており、どの程度比較可能かを、具体的な歴史的事象や文学作品に焦点を当てて検討することで、比較文学という研究手法を用いつつ、刷新することを目指した。研究成果としては論文や書籍、翻訳書などを出版したものの、資料調査をはじめとして課題全てをこなすことは叶わなかった。その理由として、この課題自体が非常に広範囲にわたり、慎重な比較検討作業にあたって労力と時間がかかるということが挙げられる。とはいえ、当初目標としていた成果は予定通りに出すことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

植民地の歴史が関わる外国文学研究は、対象それ自体を真摯に探求するのは当然であるが、必然的に自らの足元の歴史の痕跡を引き寄せずには置かない。その双方を見極めるに適切なアプローチが、自身の足場たるカリブ文学研究にどのように見出せるかを数年間、調査・研究・執筆の結果、仮説として捻り出したのが、比較冷戦文学史なるアイデアである。イギリスに支配されていたカリブ海地域、帝国日本に支配されていた朝鮮半島や沖縄といった地域を単に旧植民地ということでは括りにするのではなく、その後の自立に当たっての困難が米軍支配と冷戦であるという共通項を、いかにして異なりつつも、同時代の現象として比較可能かを探求した。

研究成果の概要(英文)：This research project aimed at unravelling the difficulties and comparability between the trans-Atlantic regions including the British Caribbean islands (such as Trinidad and Jamaica) and the trans-Pacific region (most notably, Korean Peninsula and Okinawa), by focussing on literatures that illustrate specific events in history such as the Korean War, militarization, and decolonization under the U.S. Cold War regime. At the same time, I used and hopefully renewed a framework of comparative literature to untie the knot that connects what have happened in the seemingly separate hemispheres. I published my first monograph, articles, and translations, related to this project, which does not mean that my initial plan for this research project was fully accomplished. It is partly because the whole project itself covers such a wide range of subjects and historical events that it necessarily takes an amount of time and energy to carefully investigate the possibility of comparison alone.

研究分野：カリブ文学研究

キーワード：帝国主義 冷戦 米軍統治 脱植民地化 カリブ文学 沖縄文学 朝鮮戦争 人種

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初は、カリブ海地域と環太平洋地域（沖縄と朝鮮半島）の、とりわけ第二次世界大戦後を描いた小説や詩作品が比較可能なのではないかと仮説を立てた。

背景は、前研究課題（基盤研究C、「英語圏カリブ・アフリカ文学の監獄と移動（不）可能性」2015年4月から2018年3月まで）にて、植民地期と脱植民地期にわたる時代の監獄文学の系譜学なるものを構想していたことと関連する。その過程で、上記の比較作業を、この系譜学作成作業のより上位の研究枠組みとして位置づけることで、よりダイナミックかつ多角的な検討のための視野が得られるのでは、と構想するに至った。

すなわち、監獄というシステムは植民地統治において必須のものであるだけでなく、植民地が形式的に終焉して以後も、形を変えながら、国境管理のための収容施設などと連動することで、当該地域の統治システムを支えてきた。それに、監獄と国境を管理する収容所との関係を具体的にみていけば、旧植民地と旧宗主国のみならず、現在の旧帝国同士の相互依存的な関係性を内側から支えるものでもあることがわかる。

本研究課題を進めていき、学会などでの発表を重ねるにつれ、研究の方向性自体は間違っていないと少しずつ確信を得ることができた。

2. 研究の目的

比較の「地下水脈」

研究の目的として念頭にあったことは、植民地に関わる外国文学研究を行うことの居心地悪さのようなものをめぐる問いである。すなわち、私の場合であれば、カリブ海地域に足場において英語圏の植民地主義を批判的に研究することになるが、それは、通常の場合であれば、帝国日本が成してきた植民地支配をカッコに入れて考えることになる。西洋と日本の植民地主義の重層性や共犯性自体を批判の対象にする視座をどのように見出したらいいか。簡潔に述べるとすれば、このようなことになる。

以上の問いは、詳述すると以下ようになる。つまり、この居心地悪さが、全面的になくなることはないにしても、ある種の弁明の表明のようなものではなく、研究それ自体の枠組みとそれを成り立たせる基盤にどのように組み込んでいけばよいただろうか。『帝国日本の英文学』のような先見的な仕事はあるにせよ、筆者の場合であれば、専門のカリブ文学を研究しながらにして、それが足元の歴史、すなわち帝国日本と主に東アジアの第二次世界大戦前後の関係性を抜きにせず、なんらかの関連性や「地下水脈」を見出すことは、いかにして可能なのか。それも、直感や思い込み、あくまで可能性にとどまる思考実験としてではなく、実証的な裏付けを伴うものとして関連づけることが、もしかしたらできるのではないか。

かといって、鏡のようにつねに「では日本はと言えば…」と鸚鵡返しのように反復するのも、一時的な「気配り」として免罪符になってしまう危険性がある。そうではない形で、カリブ海地域の帝国主義の歴史と文学史を批判的に記述しながら、帝国日本の歴史を架橋するような地下水脈を見出す作業への希求こそ、この研究の出発点である。

とりわけ、本研究課題をこなすなかで、以前からの持ち越し課題であった博士論文の出版（『持たざる者たちの文学史』）に取り掛かり、原稿の翻訳、加筆修正に研究のアップデ

ートを行う作業が、本研究の基盤を明確にするにあたり、非常に有益であった。ちなみに、『持たざる者たちの文学史』では、カリブ海地域をはじめとする第三世界の脱植民地化の世界的な運動を描き出す文学作品を扱うことで、帝国同士の協調関係や共犯関係のなかから新たな集団的営為を浮かび上がらせる作業に光を当てた。すなわち、新旧帝国間の軍事的な協調関係や旧宗主国と旧植民地のあいだの統治関係の継続を、いかにして脱植民地化の世界史のなかの具体的な出来事において見出していくかということが「地下水脈」を発見できるかどうかの鍵となるだろう、と思いついた。

具体的な出来事として重要なのが、監獄と軍事である。監獄や収容所の設置は、刑罰社会の自然化につながるだけではない。軍事基地の建設及び拡大と不可分である。この両者が、冷戦を一つの軸にした植民地統治の再編にもかかわらず、帝国の屋台骨とも言える軍事組織と経済循環を維持及び継続してきたのであり、その矛盾が極限として現れる場所でもある。

これらは本研究の軸であるが、以下では、この課題で明らかにしえた範囲で、より具体的な出来事や作品、分析にあたっての方法論に的を絞って記述する。

監獄と軍事

本研究は、以上のような問題意識のもとで、環太平洋地域（朝鮮半島と沖縄）の統治過程が、第二次世界大戦後、いかにして米軍統治によって継続したかということ、他方では、いかにして環大西洋地域（主にカリブ海地域）におけるイギリスの帝国支配が、アメリカの軍事支配へと継続拡大されていったかについて、比較検討を目的とする。その類比可能性自体を問うにあたって、監獄と軍事基地建設による帝国統治のプロセスを具体的に検討する。

このような作業にあたって重要な特定の作家や作品を挙げれば、一方では、Samuel Selvon, *A Brighter Sun* (1952), Ralph De Boissière *Rum and Coca Cola* (1956), David Chariandy, *Soucouyant* (2007)がある。これらはいずれも、一九四〇年代前半のトリニダートの米軍基地をめぐる記憶と現状に別々の仕方でアプローチしている。ただし、そこで人びとが基地建設に翻弄され、人種やジェンダーのカテゴリーが変容し、暴力が過剰になり、生活の基礎が奪われる、ということはいずれも共通している。トリニダードやジャマイカの場合、第二次世界大戦の継続（日中戦争の継続）と第二次世界大戦中及び以後の世界秩序における英米の協調政策（大西洋憲章）が、基地建設の直接の原因である。

また、東アジアのとりわけ朝鮮半島や沖縄にて、米軍基地が固定し、より社会に組み込まれていくのは、極東での中国革命、そして、朝鮮戦争以後である。朝鮮戦争については、やはりトリニダード出身の革命家C・L・R・ジェームズが移民局にて勾留されていた際にエリス島にて執筆したハーマン・メルヴィルについての特異な研究書 *Mariners, Renegades, and Castaways* (1952)にて触れている。近年は、合衆国の作家トニ・モリソン、*Home*(2012)、中国出身の在米英語作家ハ・ジンが *War Trash*(2004)にて別々の角度からアプローチしている。また、トリニダードで技術者として基地建設に関わった David Ogden は、戦後沖縄の琉球列島米国民政府にて民政副長官を務めた。戦後沖縄の反基地運動において、米軍が沖縄の民衆をトリニダードの民衆に重ねていたことは、軍関係の資料から明らかになっている。ただし、統治技術の移転がどのように行われたかについては、資料を用いた上でより詳細に明らかにする必要がある。

3. 研究の方法

枠組みの構築：類比可能性の論理

以上のような別々の作家群、トリニダードやジャマイカ、在米ないし合衆国の作家を扱いつつ、なお、東アジアの歴史と文学に言及し、論じることは、論者自身の本来の研究領域からすればかなり広い範囲を扱うことになるため、ともすれば足元を掬われてしまいかねない危険性がある。自分の言いたいことに都合がいいように、対象を当てはめているのではないか。それぞれの歴史や文学の積み重ねを十分に知ることがなく、点だけの浅い範囲でしか理解しようとしていないのではないかという批判は、想像可能であるし、どれだけ慎重に論じようとしても、それらの批判を十分に受け止めきれぬかについては、絶対の自信があるわけでもない。

そのため、比較にあたって、ある程度の論理や倫理のようなものは必要とされる。類比可能性をどこまで慎重に見極めるのかは、まず何よりも先行して行う必要があるだろう。

比較にあたっての重要な柱は、上記のように、米軍による（基地建設を含む）軍事統治と冷戦状況である。時代は少しずれるとはいえ、これこそがカリブ海地域と東アジアをつなぐ条件であり状況だったからだ。しかし、どのように冷戦状況が作られ、どのように軍事基地が当該社会に組み込まれていったかは、かなり異なる。東アジアでは沖縄戦と朝鮮戦争、済州島四・三事件というそれぞれの地域に壊滅的かつ消し難い痕を残すことになった出来事は、カリブ海地域では、確かに米軍基地が住民の意思を無視して建設されたとはいえ、決して同時期に同規模の破壊を伴ったわけではなかった。本研究の成果の一部

（Yoshida 2020）では、主に、大西洋憲章による英米の軍事的協調政策が、第二次世界大戦後も継続するのみならず、帝国日本も取り込むことにより、冷戦状況の準備をしたと論じた。

その際に、1950年の朝鮮戦争開始から1952年のマッカーラン＝ウォルター法施行にかけての時期を重視した。この時期に、共産主義者が合衆国内外で公式な敵として名指されただけでなく、反共主義のもとに、日米、英米協調政策を軸としつつ、旧植民地での民主主義的なプロセスへの介入が、公式・非公式になされたからである。

この時代背景をもとに、以下に挙げた本研究の成果の一部では、環大西洋地域の経験と、環太平洋地域の経験を、「対形象的」ではない形での「翻訳」（酒井直樹、メッサドーラ／ニールソン）という概念によってつなぐ試みをおこなった。しかし、これはがどこまで成功しているかは未知である。

分析の視座

以上のような大きな枠組みのなかで具体的に分析を進めるにあたって重視したのが、人種化とジェンダーの階層化である。上記の歴史的な出来事の圧倒的な差異を考慮に入れた上でなお、考える必要があるのは、東アジアもカリブ海地域も、それぞれの日本やイギリスという旧帝国から新たなアメリカという帝国に統治が引き継がれていく中で、「似たような」経験をしているということである。それは基地建設により一時的にドルが流れ込む時期があったとはいえ、貧富の差が拡大し、女性が売春をはじめとする性的搾取の対象となることで、性差がより強化及び固定される。同様に、被統治地域の男性性にも変化が生まれる。男たちにとっては、「守るべきもの」である「女性（性）」を奪われる、あるいは、統治主体としての地位を奪われることで、より男性性が強化される場合もあれば、男

性性として「去勢」状態にある、という意識を抱く場合もある。旧宗主国（イギリスや日本）と新たな統治主体（アメリカ、米軍）に挟まれて、人種化とその階層がさらに強固になる。場合によっては、ある種の「反米」意識と言ってもいいものが生まれる。それは、人種という肌の色の差異を乗り越えて新たな集団性をつくりだすきっかけになりうるのか。

これまでに触れた作品を実際に分析するにあたり、とりわけ黒人兵がどのように描かれるかということに焦点を当てて比較検討を試みた。彼らの存在は、米軍による基地建設と軍事統治という非対称的な状況下において、重層化した人種のグラデーションを内破しうる一つのきっかけでありえた。敵のなかに「被抑圧者」を発見し、同じ被抑圧者としての思いを投影する先が黒人兵だったからだ。Samuel Selvon, *A Brighter Sun* (1952)における黒人兵は、トリニダードのインド人コミュニティにとって自らの従属状況を振り返るきっかけとして描かれる。Ralph De Boissière, *Rum and Coca Cola* (1956), David Chariandy, *Soucouyant* (2007)は、米軍基地のもたらす暴力が、女性の身体への侵犯として現在にも続く忘却を促すことを強調するだけではない。旧植民地それ自体を、侵犯された女性性としてアレゴリカルに描く。ただ、黒人兵の描かれ方については、例外もある（これについては、詳細は省くが、次の研究での検討課題としたい。また、Boissière と Chariandy の作品の詳細な分析についても、やはり次の研究の課題としたい）。

あるいは、八・ジンの描く朝鮮戦争時の中国軍人民義勇兵にとってはどうだったか。トニ・モリスンの描く黒人兵は、合衆国内では圧倒的に人種差別の暴力の被害者でありながらも、朝鮮戦争においては加害の先鋒を務めた。その正反対の状況を、いかに現在の合衆国の歴史記憶に位置づけることができるか、というのがモリスンの試みである。沖縄の歌人新城貞夫は一九七二年、沖縄の日本「復帰」の隘路の「外部」を託すようにして、黒人米兵に向けて短歌を詠んだ。これらの作家や詩人の試みの共通項をあえて記述すれば、いずれもが、肌の色や人種による階層化に直面して、男性性の内向する暴力性や屈折と向き合いつつも、それぞれ独自の仕方でも、実際には行われなかったけれども、可能性としてあり得たかもしれない横のつながりを見出そうとしている、ということだ。

4. 研究成果

成果内容については、結果から言うと、当初の予定以上に出すことができた。もちろん、それまでの積み重ねがたまたまこの時期に成果として出たということかもしれない。なかには、研究課題に取り組むなかで徐々に方向性や論じる内容の輪郭が明確になったものも多い。そのため、研究成果自体は多少前後するものの、当初の目標であった英語圏のジャーナルへの論文投稿及び掲載は、少なくとも一つ以上達成することができた。

課題として積み残したことも多い。とりわけ、資料調査は喫緊の課題である。やはり、実証的なものとして読解及び分析を支えるには、資料は欠かせない。また、Boissière と Chariandy の作品については、なるべく早めに読解及び執筆を進めたい。

成果は以下が代表的なものである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Yoshida Yutaka	4. 巻 Online First
2. 論文標題 Blueprint for interracial solidarity: C. L. R. James' sMariners, Renegades, and Castaways as prison writing	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 The Journal of Commonwealth Literature	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1177/00219894211004996	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Yutaka Yoshida	4. 巻 21(1)
2. 論文標題 The Cold War regime of translation in Trinidad and Okinawa: Samuel Selvon' s A Brighter Sun and Sadao Shinjo' s tanka poems	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Inter-Asia Cultural Studies	6. 最初と最後の頁 38-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/14649373.2020.1730639	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 吉田裕	4. 巻 51号
2. 論文標題 人びとが集まることはなぜ「危険」なのか？ーポーとボードレールに見る都市と植民地の群衆	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京理科大学紀要（教養編）	6. 最初と最後の頁 151-170頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 吉田裕	4. 巻 24号
2. 論文標題 比較冷戦文学史に向けて 『持たざる者たちの文学史』書評会提題者、阿部小涼氏および新城郁夫氏への応答	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 クアドランテ	6. 最初と最後の頁 201-209
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 吉田裕	4. 巻 45
2. 論文標題 非同盟運動の手前で ハ・ジン『戦争の屑』における朝鮮戦争と第三世界主義の萌芽	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 PRIME	6. 最初と最後の頁 6-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 吉田裕	4. 巻 2月号
2. 論文標題 軍事帝國的な統治と恥 トニ・モリスン『ホーム』における朝鮮戦争と黒人兵	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 福音と世界	6. 最初と最後の頁 24-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件(うち招待講演 3件/うち国際学会 4件)

1. 発表者名 Yutaka Yoshida
2. 発表標題 Toward a Transpacific Solidarity in the Cold War Era: C.L.R. James' s Mariners, Renegades, and Castaways and Sadao Shinjo' s Tanka Poems
3. 学会等名 Canadian Association for Commonwealth Literature and Language Studies (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yutaka Yoshida
2. 発表標題 Transcending the Pacific, Disrupting Racial Framework: An Incomplete Encounter between Sadao Shinjo and the Colored GIs in Okinawa
3. 学会等名 Pedagogies of the Sea (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yutaka Yoshida
2. 発表標題 The U.S. Military Base and the Configuration of Race: The Lonely Londoners and Mariners, Renegades, and Castaways as the Cold War literature
3. 学会等名 42nd Annual Conference of the Society for Caribbean Studies (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 吉田裕
2. 発表標題 一九六〇年代沖縄における「反米主義」と反戦・反基地運動 新城貞夫の短歌詩を中心に
3. 学会等名 沖縄統治性論研究会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 吉田裕、申知瑛、片岡佑介、松田潤
2. 発表標題 非同盟運動の手前で ハ・ジン『戦争の屑』における朝鮮戦争と帝国支配
3. 学会等名 第9回東アジアと同時代日本語文学フォーラム (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 吉田裕、阿部小涼、新城郁夫、岩崎稔
2. 発表標題 「かれら」とは誰か 『持たざる者たちの文学者』を読む
3. 学会等名 WINC (Workshop In Critical Theory) (招待講演)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 吉田裕	4. 発行年 2021年
2. 出版社 月曜社	5. 総ページ数 415
3. 書名 持たざる者たちの文学史 帝国と群衆の近代	

1. 著者名 ジョージ・ラミング、吉田裕訳	4. 発行年 2019年
2. 出版社 月曜社	5. 総ページ数 480
3. 書名 私の肌の砦のなかで	

1. 著者名 スチュアート・ホール、ビル・シュワルツ、吉田裕訳	4. 発行年 2021年
2. 出版社 人文書院	5. 総ページ数 484
3. 書名 親密なるよそ者	

1. 著者名 申知瑛，嶽本新奈，吉田裕，片岡佑介，松田潤，佐喜真彩，佐久本佳奈，君島朋幸，金利真，清水雄大，番園寛也，西亮太	4. 発行年 2022年
2. 出版社 小鳥遊書房	5. 総ページ数 279-316
3. 書名 『言語社会を想像する：一橋大学言語社会研究科25年の歩み』中井亜佐子，小岩信治，小泉順也編著	

〔産業財産権〕

〔その他〕

researchmap
<https://researchmap.jp/ytkysd>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
カナダ	York University			